

奉祝式典挨拶

本日、天皇陛下御即位二十年奉祝山口県民大会がたくさんの県民の皆様のご参加のもと、開催されましたことは、誠に喜ばしい限りであります。国民の皆様、そして山口県民の皆様とご一緒に、お喜び申し上げますとともに、謹んで祝意を表したいと思います。

天皇陛下におかれましては、平成二年十一月十二日、皇居において「即位礼正殿の義」が厳かにとり行なわれ、めでたく本年で御即位二十年を迎えられます。

世界同時不況の中、ことし新年を迎えての天皇陛下のご感想に、このようなお言葉がございました。

「国民の英知を結集し、人々の絆を大切にして、お互いに助け合うことによって、この難局を乗り越えることを願っています」

まさに天皇陛下のお人柄らしいお言葉であると思いました。

日本という国は本来、絆を大切にし、家族の絆、地域の絆、そして国民の絆の中で助け合い、いろいろな困難を乗り越えてきました。そして、それぞれ抱えている問題についても、お互いが協力し合って乗り切ってきました。

よく「国柄とは何か」という議論がありますが、これは古代からの長い歴史の中において、日本人の積み重ねの中に自然に出来上がってきたものが、私は日本の国柄ではないかと思っています。

日本の歴史というのは、いわば「綴れ織り」のようなものであります。日本の長い歴史の中に、様々な人々の歴史や営みが織り込まれています。綴れ織りを貫く糸、それは切れ目のない糸であり、中心線は皇室であります。

まさに一本の線でずっと古代から今日まで繋がっている世界に比類なき国の姿と言ってもいいでしょう。

昭和五十年代のことではありますが、当時外務大臣だった私の父・安倍晋太郎に駐日アメリカ大使だったマンズフィールド大使が、このような質問をされたことがあります。

「私は日本の経済発展の秘密についてずっと考えてきたのですが、安倍さん、何だと思いませんか」と父に聞かれました。父が「日本人の勤勉性ですかね」と答えると、マンズフィールド大使は皇居の方を指さして、「天皇です」と明言されました。戦後の日本社会が基本的に安定性を失わなかったのは、行政府の長とは違う「天皇」という微動だにしない御存在があって初めて可能だったのではないかと。マンズフィールド大

使はこう、おっしゃりたかったのだと思います。

私は総理大臣当時、天皇陛下と様々な機会でご一緒する栄誉に浴しました。式典によっては極めて形式的で、長時間に及び、出席者の中には姿勢を崩す人達も見受けられることもありますが、そうした中においても、常に姿勢を正し、発言される方を温かく見守っておられる両陛下のお姿に感動し、自らの気の緩みを戒めてきました。新嘗祭など宮中祭祀においても総理として参列致しましたが、深夜、厳しい寒さの中、とり行われる神事において、ひたすら国民の安寧を祈る天皇陛下に深い感銘を受けました。これは私だけでなく、その場に出席していた人達が一様に抱いた感動であります。

天皇陛下の高貴なお人柄、常に真摯な姿勢。陛下の存在そのものが私達に安心感と勇気を与えて下さいました。

「即位より十年たちて 日の暮れし広場につどふ人びとと祝ひの調べとも聞き入る」
即位十年をお祝いする国民祭典のあと、天皇陛下がお詠みになったお歌です。
国民と共に喜びを分かち合う陛下のお気持ちが満ち溢れています。喜びも悲しみも常に国民とともに分かち合う、国民とともにいる、それが日本の皇室と言えるのではないのでしょうか。

平成の御代になって二十年、両陛下、皇室にとっても平坦な道のりではなかったと思います。そうした中で、ひたすら国民の幸せを祈ってこられた天皇陛下に思いを致し、この美しい国柄を持つ日本に生まれたことを皆様と共に喜びたいと思います。ここに天皇皇后両陛下のご健康と皇室のご繁栄をお祈り申し上げ、お祝いの式辞と致します。